

みの EDO

発行：多治見市美濃焼タイル振興協議会
TEL 0572-43-2141
発信：多治見市・笠原町東京情報局
tilesea.ms@gmail.com

トピックス

「全国ふるさとまつり」にて タイルアート体験と「美濃カフェ」を出展！



コルクの上にタイルを並べて、デザインを考え中



タイルをボンドで
貼っていく



たくさんの種類のモザイクタイルを用意



フォトフレームの作品を前に記念撮影

さる10月1日(土)～2日(日)、神奈川県大和市の主催により「第7回全国ふるさとまつり/うまいもの市」が開催された。会場となった小田急江ノ島線・相鉄線「大和駅」の東側プロムナードは、多くの人でにぎわった。

多治見市笠原町でタイル企業、食器企業等で構成する「笠原陶磁器工業協同組合」の出展は、今回で3度目とな

る。モザイクタイルを貼るコースターとフォトフレーム作り、また、「美濃カフェ」として喫茶コーナーを催した。「うまいもの市」というだけあって、全国各地の食べ物や食料品の出展がメインを占める中、大人も子供も気軽に楽しめるこのタイルアートは珍しくもあり、毎回人気を博している。



コースターの見本



「美濃カフェ」で選べるマグカップ



体験料金は、コースターは200円、フォトフレームは300円。美濃カフェは1杯300円



作品（またはマグカップ）は、多治見市のパンフレットとともに袋に入れて渡す

子供も大人も楽しめるタイル細工

20席ほど設けられた椅子は、ほぼ常に満席。たくさんの種類のモザイクタイルを前にし、小さな子供から大人まで、楽しそうに、かつ真剣に作業にいそしんでいた。

小学生の娘さんと一緒にフォトフレーム作りをしていたお父さんは、ハート型のタイルを手にし、「タイル、いいですね、家でも作ってみたいです。どこに売っているんですか。高いんですか?」と、タイルに興味をもたれた様子。

「実際に触ってもらると、タイルの魅力が伝わると思い

ます」と、協同組合事務局長の高木博光さん。出展3回目ともなると、このブースを覚えていて、「今年も」と、目指して来てくれる方もいるそうだ。

「美濃カフェ」は、コーヒーとジュースをいただける喫茶スペース。「コーヒーにカップがついてきます!」との呼び声どおり、売りは、何種類もあるマグカップから好きなものを選び、飲み物をいただいた後、そのカップを持ち帰れること。

並んだマグカップを前に、「どっちがいいかしら」とスタッフに話しかける人もいて、ひとときの交流が生まれていた。

輪之内町商工会にてタイルアート除幕式を開催！



記念撮影。左は輪之内町のゆるキャラ・かわばたくん、右は多治見市のうながっぱ



左から多治見市長 古川雅典氏、輪之内町長 木野隆之氏、郡上市長 日置敏明氏



タイルアートの大きさは縦2.4×横2.1メートル

郡上踊りでの交流 20 周年！

さる 10 月 1 日（木・祝）、岐阜県輪之内町商工会館にて、巨大タイルアート除幕式が行われた。

このタイルアートは、着物を着た男女二人が踊る姿を描いたもの。輪之内町で毎年 8 月に開催される「納涼ふるさと祭り」では、郡上市の踊り手を招き、郡上踊りが披露されている。この交流が今年で 20 年となるのを記念し、輪之内町立中学校の生徒たちの手で制作された。タイルには、笠原町のモザイクタイルが使用された。

式次第は以下のとおり。

- 1 開式の挨拶 輪之内町商工会会長
- 2 来賓挨拶
- 3 来賓紹介
- 4 序幕
- 5 作品紹介
- 6 記念品贈呈
- 7 閉式の挨拶

登壇者の挨拶（要約）

●輪之内町商工会会長 古田正弘氏

このたび、巨大タイルアートがお披露目となりました。輪之内ふれあいフェスタが開かれる今日の日のように大勢の方、遠路からお越しください誠にありがとうございます。これは 20 年来、この輪之内町で郡上踊りが毎年開催された、その親交を記念して作られたものです。これを機にさらに親交を深めていきたいと思ひます。

●輪之内町長 木野隆之氏

郡上市との交流がはじまって 20 年目となります。なかなか生演奏の郡上踊りを体験することはできないので、近隣からも評価が高いです。これからもご縁を続けていきたいと思ひます。その記念事業としてのタイル

アートということで、今日は郡上市長と多治見市長においでいただき、イベントができることを非常に嬉しく思っています。

●多治見市長 古川雅典氏

輪之内の庁舎は、何年たっても立派で風格があります。いかにタイルが素晴らしいか。このタイルの宣伝マンが多治見市長でございます。今日は輪之内中学校の皆さんに集まってもらっています。みんなで小さなタイルを組みましたので、出来上がった時の喜びがありますね。今年の 6 月多治見市にモザイクタイルミュージアムができあがりました。ぜひこの機会に多治見市に来てください。中学生の皆さんがお互いの土地に行き、交流をしてほしいですね。

●郡上市長 日置敏明氏

多治見市のタイルを使って、輪之内の中学生の皆さんが 3 万何千枚のタイルで素晴らしい絵を作ってくださいました。タイルアートの原画は、郡上市八幡在住の画家・水野政雄先生の絵です。水野先生は毎年の郡上踊りのポスター作成をさせていただいております。水野先生の絵が巨大タイル画になったということで大変喜んでます。こうしたご縁を大事に、今後もよろしくお願ひします。

来賓として、笠原工業組合理事長 隅谷建壬氏、郡上八幡おはやしクラブ理事 此島由多子氏、輪之内町立輪之内中学校校長 香田静夫氏が紹介された。

「見学&体験 ファインダー越しの工場見学」 ～多治見市モザイクタイルミュージアム



見学先は、杉浦製陶株式会社（写真上）、有限会社 YMM（写真下）の2カ所



特別展と今回の企画のチラシ

9月22日（木・祝）、多治見市モザイクタイルミュージアムにおいて、「見学&体験 ファインダー越しの工場見学」が開催された。この催しは12月18日までの特別展「工場賛歌：原料編」の一環として企画されたもので、参加者が各々にデジタルカメラで撮影しながら工場を見学するというユニークな内容。この様子をレポートする。

男性の参加者、多し！

集合時間9時30分にミュージアムに集まった参加者15名には、一眼レフのカメラを抱えた50～60代くらいの男性が目立った。同じタイル関連の催しといっても、女性や子供たちでにぎわうモザイクタイルコースター作りなどはまた違った雰囲気。

男性のお一人に参加理由を尋ねると、「『ファインダー越しの工場見学』というタイトルにじびれてね」と、粋な言葉が返ってきた。

見学先へはバスで向かった。目的地は、土からタイルの原料をつくる有限会社 YMM、タイルの製造を行う杉

浦製陶株式会社の工場の2カ所。

バスの中では講師を務める小寺克彦さんが挨拶。小寺さんは、この特別展の撮影を担当している。「いろんな撮り方がありますがね。個人によって全然違うと思います」と、自ら撮影した写真を紹介。スイッチがずらりと並んだ写真には「スイッチにほこりがかぶっていて、逆にこれがきれいな色だなと思って」とコメント。

工場の様々な姿を捉えた写真に、「こんな見方もあるのか」と感心したり、「格好いい!」と感動したり。「自分でもこれを撮っておきたいな」と、こっそり(?)構図を頭に入れておく。

参加者による
写真1

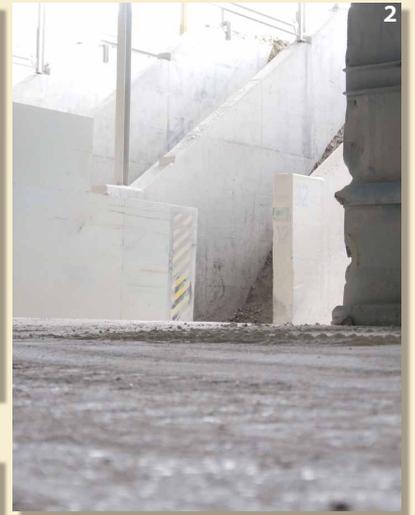


写真1、2：大手久美さん

写真3、4：森上さん



写真5、6：横田さん

ミュージアムの学芸員の村山閑さんは、「機械にはすべてこの形はこうでなければいけない、という理由があって、それがすごく美しく見えると思います。そういう視点で見ると別の楽しみかたができるかなと思い、企画しました」と語った。

お二人の話を聞いていたら、「わびさび」「用の美」なんて言葉が頭に浮かんできた。

細部にまで目を凝らして

工場では工程に沿って見学し、そのつど解説がなされた。まずは原料の土が置かれた場所へ。その大きな空間に圧倒され、上から下へと原料が降りていく仕組みに感心する。

土にはいろいろな種類があり、粒の大きさなどの形状や色も異なることを知る。黄色がかった色はとてもきれ

い。最初から何枚も撮影してしまう。

解説に聞き入り、質問をする一方、好奇心の赴くまま、あらゆる場所、細部まで目を向け、撮影対象を探す参加者たち。カメラで撮るといふ行為により、ふつうの「見学」ではなく、「見る」といふ行為が能動的になるのが面白い。



説明に聞き入る参加者たち



参加者による
写真2



写真7、8：松嶋さん

写真9、10：宮田さん



写真11、12：記者

そうやって忙しく動いていると、時間があっという間に過ぎてしまい、「もう次の場所に行きますよ～」と促されることもしばしばだった。

ちなみに、当日の天気はあいにくの雨。カメラ片手に傘をもつのが面倒だなあ、なんて思っていたら、「その天気ごとに見える風景が違う。今日は雨ならではの写真が撮れますね」と、小寺さんが話すのが聞こえてきた。

建物を振り返ると、雨に濡れた姿が健気に佇んでいるように見える。工場内は、窓から入る光が弱く、薄暗いのがかえて味わいとなっている（その他、雨のほうが、ほこりが立ちにくいという利点も）。

雨もまたよし、と思うと、いっそう写真を撮る枚数が増えるのだった。写真の枚数は、自分の心が動かされた回数に比例している。

写真発表会

見学と撮影が終了した後は、ミュージアムの一室で、自分が撮影した写真の中から5点を選んで披露。

写されたものは、工場の機械やそこで働く人、型がとられたタイル、無造作におかれた筆記用具、ずらりと並んだ道具、鉄くず、さびついた窓……。機械をロボットに見立てたという写真もある。

まさに人それぞれの視点が現れている写真を興味深く見つめる。

機械の轍（わだち）を撮った参加者が「これは働いた証ですね」と解説すると、工場で説明してくださった方が、「きれいに掃除しなさいと、言われてるんですが……」と返し、笑いが起こる場面も。

ぐっと対象に迫って撮った写真に対し、「ローアングル



作品ファイルを手にして話す小寺克彦さん



他の参加者の写真を見る

で、なめるような視線がいいですね」と小寺さん。

参加者からは「皆さんが工場のいろんなところで、いろんな撮り方をされているのを見て、こうやって撮るんだな〜と感心しました」という感想も聞かれた。

タルコフスキーの映画!?

工場内には、機械が動く音がダイナミックに響いていたが、写真では空間の迫力はそのままに、一転して静けさを感じられた。これは工場の空間に色彩が少ないのに加えて、原料の白い土により、全体がうっすらと白いせいかもしれない。

「タルコフスキーの映画のよう」という言葉が飛び出し、思わずうなってしまう。

世間では、「工場萌え」なる言葉も登場し、コンビナートや工場地帯の見学ツアーが人気を博している。タイルの工場は、そうした工場とはまた異なり、扱うものが土など自然素材であること、手仕事の要素を残していることが味わいになっていると感じる。

この工場の空間も、タイルの魅力の大切なひとつと知る企画となった。

*タルコフスキー：独特の映像美で知られるロシアの映画監督

特別展 「工場賛歌：原料編」 開催中



ミュージアムの特別展の入り口



会場では古い道具や土のサンプルなどを展示している。写真は、この見学ツアーの講師を務めた小寺克彦さんによるもの



雨の日のミュージアム4階。
ワイヤーに付いたタイルに、雨のしずくが輝いていた